

## 書 評

# 東浩紀の再帰的物語

——動物化するポストモダンと自由について——

今 枝 法 之

東浩紀『動物化するポストモダン』講談社，2001年

東浩紀・笠井潔『動物化する世界の中で』集英社，2003年

東裕紀・大澤真幸『自由を考える』日本放送協会出版会，2003年

### 一、はじめに

第二次世界大戦後の冷戦期には、近代化論とマルクス主義という対抗的言説が競合していた。いわゆるブルジョワイデオロギーとしての近代化論は、前近代社会から近代社会への移行という観点から社会を捉えようとしていた。近代化論は産業（工業）社会論と連動していたのであり、すべての社会は農業中心の前近代社会から離陸し、工業化を推し進め、近代社会に到達するという、単線的な歴史観に基づいた現状把握を行っていた。それに対して、マルクス主義は封建社会から資本主義社会を経て社会主義社会へと到る弁証法的歴史観に基づいた社会認識を採用していた。

近代化論や産業社会論が歴史発展の二段階説であり、漸進的変容を想定していたのに対し、マルクス主義は三段階説であり、革命的変容を主張していた点が異なるとはいえ、両者が目的論的な歴史観であったことは共通している。種類は異なるとはいえ、未来においてめざすべき理想的な社会が明確に認定され

ており、そこに至るためのプロセスの一局面として現代社会を把捉することが試みられていた。ヴァーチャルな理想的未来から逆照射することによって、同時代社会の位置づけや理解はきわめてはっきりしていたのである。

ところが、近年、現代社会を把握するパラダイムが曖昧化している。冷戦時代末期の1980年代あたりからは、現代社会はモダンかポストモダンか、という別種のオルタナティヴが浮上してきた。現代を資本主義社会として捉えるか、あるいは産業社会として捉えるか、という二者択一ではなく、モダン社会か、あるいはポストモダン社会か、という選択肢がもたらされたのである。その選択肢を分ける基準は、「歴史の終焉」にまつわる判断、あるいは目的論的歴史観自体の当否に関わる認識である。近代はまだ終わっておらず、未完の近代における目標をさらに継続して追及すべきだというモダン派と、すでに近代は無根拠化しており、近代を支えてきた「大きな物語」は崩壊している、そして時代はもはやモダンではなくポストモダンに推移したとするポストモダン派との対立がみられるようになったのである。

目的論的歴史観を内包していた近代化論とマルクス主義は、ともにモダンの理論としてポストモダン派から批判されることになった。また、自由・平等・進歩・民主主義といった近代的理念や合理主義・理性主義に対する懐疑も提起され、近代および近代主義の終焉が宣言されたのである。とはいえ、現代をモダンと見るか、ポストモダンと見るか、という点に関しては決定不可能である。現代社会においては近代的理念や制度が完全に一掃されたとはいいがたい一方で、近代化論やマルクス主義のようなクラシカル・モダン理論がいまだに効力を持続させているというわけでもない。きわめて両義的で曖昧な時代にわれわれは生きているといえるだろう。評者はこれまで、脱目的論的なポストモダニゼーション（脱近代化）という概念を提出し、また、この概念と両立可能な再帰的近代化というギデンズやベックの議論を支持してきた。しかしながら、現代をモダニティから切断されたポストモダニティとして特徴づけようとする、あるいはポストモダンの側面を過度に強調する議論が日本において見られる。

その代表例が東浩紀の論説である。(もちろん、その先駆的形態が浅田彰の『逃走論』であることはいうまでもない。)

本稿では日本におけるポストモダン派の現代社会論としてきわめて興味深い東の言説を検討してみたい。

## 二、動物化するポストモダン

『動物化するポストモダン』（講談社、2001年）においては、まず、ポストモダンが「オタク系文化」の構造に現われている、とされる。「オタク」とは「コミック、アニメ、パーソナル・コンピュータ、SF、特撮、フィギュアそのほか、たがいに深く結びついた一群のサブカルチャーに耽溺する人々の総称」である。こうした「一群のサブカルチャー」が「オタク系文化」と呼ばれる。この「オタク系文化」は日本独自のサブカルチャーではなく、広く国外に及んでおり、世界的なポストモダン化の流れの中で理解すべきだとされる。

日本では「オタク」的な人々に出現と、「ポストモダニズム」が流行し始めた時期がほぼ一致している（1980年代）。当時の日本のポストモダニズムは、「日本主義」（あるいは日本社会のナルシシズム）と結びついていた。当時の日本のポストモダニズムは近代＝西洋、ポストモダン＝日本と捉え、日本的であることが歴史の最先端であるとみなしていた。「オタク系文化」の起源はアメリカのサブカルチャーにあったのだが、そこには「敗戦でいちど古き良き日本が滅びたあと、アメリカ産の材料でふたたび擬似的な日本を作り上げようとする複雑な欲望が潜んで」いた。「オタク系文化」の存在は、一方で敗戦の経験と結びついており、日本人のアイデンティティの脆弱さを見せつけるおぞましいものであるが、他方で、「オタク」たちの擬似日本的な想像力は独立した文化にまで成長し、世界の最先端に立つ日本という幻想を与えた。このように、「オタク系文化」の出現と当時の日本のポストモダニズムの流行は1980年代の日本のナルシシズムを共有しており、「オタク系文化」には戦後日本の「アメリカからの文化侵略の、近代化とポストモダン化が与えた歪みの問題がすべて

入っている」と東はいう。

以上のように、「オタク系文化」について考えることの重要性が確認されたのであるが、東の関心は、日本という枠組みを超えて、「オタク系文化」がより大きなポストモダンの流れと呼応していることを示すことだとされる。

そこで、「オタク系文化」のポストモダンの特徴が二つ示される。一つは「二次創作」であり、「オタク系文化」におけるマンガ、アニメ、ゲームのパロディーないし模倣的創作が、オリジナルとコピーの区別が弱化したポストモダンのシミュラクルとなっているということである。もう一つは「虚構重視」の態度であり、それは「オタク」たちが日常的な社会的現実ではなく、虚構の世界のほうを重視しているということであるが、それはJ.F・リオタールのいう「大きな物語の凋落」と対応しているのである。「人間や理性の理念」、「国民国家や革命のイデオロギー」といった近代を正当化していた「大きな物語」が弱体化し、その空白をサブカルチャーで埋めようとするのが「オタク」だというわけである。「オタク系文化」は「シミュラクルの全面化と大きな物語の機能不全という二点において、ポストモダンの社会構造を」反映している、とされる。

以上の議論を前提として、次の二つの疑問が提起される。(1)ポストモダンではオリジナルとコピーの区別が消滅し、シミュラクルが増加するが、それはどのように増加するのか？ (2)大きな物語が失調したポストモダンの世界では人間はどのように生きていくのか？ 人間の人間性はどうになってしまうのか？

まず、第一の問いに関しては、近代ではツリー・モデルで世界が捉えられていたが、ポストモダンではデータベース・モデルで捉えられる、という。近代のツリー・モデルにおいては、意識に映る表層的な世界の背後にそれを規定している大きな物語＝深層がある。(いいかえれば、個々の現象は原理原則としての大きな物語のパラダイムの中で解釈される、あるいは表層の世界は大きな物語という根幹から派生したものとみなすことができる、ということである。) それに対して、ポストモダンのデータベース・モデルとは、インターネットに

代表されるように、中心や大きな物語は存在せず、深層にあるのはデータベースである。表層は深層だけに規定されるのではなく、表層レベルで自由な読み込みが可能である。オタク系の消費者たちは、こうしたポストモダンの二層構造に敏感であり、シミュラクルが宿る表層と設定というデータベースが宿る深層を明確に区別している、という。ここで東が主張したいことは、これまでのポストモダン論が近代のツリー・モデル（階層秩序）が崩壊したことは認識しているが、データベース・モデルに取って代わられたことを自覚していなかった、ということである。つまり、現代社会のシミュラクルは無秩序に増殖したのではなく、データベースの水準があって、初めて有効に機能しているという点である。データベースは良いシミュラクルと悪いシミュラクルとを選別する装置であり、二次創作の流れを制御している、とされる。ポストモダンにおいては、旧来のオリジナルとコピーとの対立から、シミュラクルとデータベースという新たな対立が台頭してきた。「オタク系文化」では原作も二次創作もシミュラクルと見なされ、その両者の間に原理的な優劣はなく、作品の核はデータベースにある。それゆえ、作家（創作者）が神になるのではなく、「萌え要素」が新たな神々になった、というのである。（個々のシミュラクル〔小さな物語〕とデータベース〔大きな非物語〕は切斷されたまま、あるいは解離したまま、共存している。「小さな物語と大きな非物語とのあいだにいかなる繋がりもなく世界全体はただ即物的に、だれの生にも意味を与えることなく漂っている。」大きな共感の存在しない、ポストモダン＝動物の時代では、小さな物語と大きな非物語、シミュラクル〔二次創作、模造物〕とデータベースの解離的な二層構造になっている、とされる。）

次に、ポストモダンでは大きな物語や超越性が凋落するが、そこでは人間性はどうなってしまうのか、という第二の疑問についてであるが、東はまず、ヘーゲル学者コジェーヴの議論を参照する。ヘーゲル的な歴史の終わり以後、日本的なスノビズム（シニシズム）とアメリカ的な動物という二つの生存様式しか残されていない。（スノビズムとは与えられた環境を否定する実質的理由がな

いにもかわらず、形式化された価値に基づいてそれを否定する行動様式ということである。シニシズムとは「生は無意味だが、無意味であるがゆえに生きる」こと、つまり、大きな物語の喪失は誰もが知っているが、だからこそ大きな物語のフェイクを捏造し、生きることに意味があるという見かけを信じなければならぬことを意味している。)しかし、過渡的な現象であるスノビズム(シニシズム)はもはや有効性を失っている。それゆえ、大きな物語の消失後、「動物化」が生じているのだとされる。

コジェーヴの『ヘーゲル読解入門』によれば、人間は「欲望」を持つが動物は「欲求」しか持たない。欲求とは特定の対象との関係で満たされる単純な渴望であり、欠乏-満足の単純な回路である。それに対して欲望は間主体的な渴望である。人間は他者の欲望を欲望する。人間の欲望は他者を必要とする。ゆえに欲望は尽きることがない。たとえば、性的な「欲求」は生理的な絶頂感で満たされるものであるが、性的な「欲望」は異性を手に入れた後でも、他者に欲望されたい(嫉妬されたい)と思い、他者が欲望する異性を手に入れたい(嫉妬する)と願うのである。人間が動物と異なり、自己意識を持ち、社会関係をつくることができるのは、間主観的な欲望があるからである。動物の欲求は他者なしに満たされるが、人間の欲望は他者が前提とされている。(自己意識を持つ人間は自己が他者から承認・賞賛されることを欲望する、といいかえることができるだろう。)

動物化とは、こうした間主体的な構造が消え、各人が欠乏-満足の回路を閉じてしまう状態の到来を意味している、とされる。現代日本の動物化の事例として東が主として挙げるのは、(薬物依存者の行動原理に近い、とされる)「オタク」である。(他の事例として「コギャル」や「ブルセラ少女」も挙げられている。)彼らにおいては、「大きな物語」の凋落(超越性の消失)以降、浮遊する「島宇宙」、「サブカルチャー」、「限定された情報空間」「小さな物語」における「有意味化戦略」が採られていたのだが、90年代以後は、「限定された情報空間」での「物語消費」さえも困難になった。動物化した「オタク」たち

はもはや、他者の欲望を欲望するといった、厄介な人間関係に煩わされず、社交性の形式のみを維持しつつ、自分の好む萌え要素を自分の好む物語で演出してくれる作品を単純に求めるのである。かつては共感の力は社会を作る基本的な要素だと考えられてきたが、ポストモダンのデータベース型世界では大きな共感は存在しえず、オタク系作品の多くは動物的処理の道具として消費されている。オタク系文化における萌え要素の働きは、向精神薬とあまり変わらないのだ、とされる。

以上のように、大きな物語が終焉した後、「オタク」に見られるような「データベース的動物」ないし「ポストモダンの人間」は、「意味」への渴望を社交性を通して満たすことができず、動物的な欲求に還元することで孤独に満たしている、と東は考えるのである。(ここでの東の議論は、オンリーワン志向やマイブームといった現象に見られるような大衆社会から分衆社会へ、そしてさらに分衆社会から個人化する社会への変容、あるいは社会におけるコミュニケーション不全症候群の高度化、といった観点から理解することも可能であると思われる。また、東は、ポストモダン化は1914年から1989年で、それ以後はポストモダンであるとしている。あるいは70年代以降の文化的世界をポストモダンと呼びたい、という。また、別の箇所では1995年以後を動物の時代と名づけたいと記している。こうした時代的切断の議論については後ほどコメントしたい。)

### 三、動物化する世界の中で

次に、笠井潔との対談集『動物化する世界の中で』を概観したい。この著作において東は、まずはじめに、現在、「大きな物語の衰弱」「象徴界の衰弱」、「イデオロギーの不在」という言葉で表現できるように、社会全体を覆い、各人の生を意味づける装置が徐々に機能しなくなっている、ということを描いている。そして、冷戦以降(90年代以後)、グローバル化、情報化、ポストモダン化の中で大きく変貌する社会的現実に対する、旧来の「思想」や「文学」

の乖離や無力化が生じている。「思想」や「文学」はどのように変わっていくべきなのか、ということが問題であるとされる。

イデオロギー（大きな物語）不在状態としてのポストモダンにおいては、自由主義や市場主義といった理念ではなく、消費社会のガジェット（インターネットや携帯電話などの情報技術系商品）が政治的現実を作り出している。その事例としては、インターネットという道具が市民運動におけるネットワーク的な組織編制や政治的想像力を規定していることや、米国同時多発テロ事件がハリウッド映画を模倣していることなどが挙げられる。

さらに、米国同時多発テロ事件以降、セキュリティの論理が台頭しており、その論理の観点からは、国外的な安全保障、国内的な治安維持、有害物質に対するリスク管理などが同一の問題として取り扱われるようになってきている。secure とは se+cura, 「配慮のない」という意味であり、セキュリティを高めることは、人々が世界に対して配慮しない世界を作り上げることである。セキュリティのシステムに守られるということは、人々が人間的関係（配慮）を喪失し、動物的な頽落状態のなかにまどろむことを意味している。そうした存在様態を理想とする社会は、ポストモダン化の必然的な流れ＝動物化の必然的帰結である、とされる。

1970年代の否定神学（ポストモダニズムあるいは決定不可能性）は、大きな物語（イデオロギー）が消失した後を埋めようとした仮構（虚構）にすぎない。現実を分析し批判するために必要なことは、イデオロギーの記憶から離れた新しい文脈・理論・言葉である。理論も前衛も消失してしまったがゆえに、東は社会評論やサブカルチャー評論に手を染めて、新しい言葉を模索し、社会や文化の秩序化の原理を学ぼうとしている、という。（日本のサブカルチャーには、現代思想の理解までできてしまうような普遍的な構造が隠されている、ということをも主張するために東は『動物化するポストモダン』を著したと述べている。）

ポストモダニズムを批判し、忘却したとしても、そのオルタナティブである、

近代的な市民社会を支える主体的で自由な人間やコミュニケーションの追求といった議論は現在説得力をもたない。それはポストモダニズム以前のタームと思考への回帰であり、現実逃避である。ポストモダニズムを否定するとしても、それに代わる言葉が存在せず、思想的な真空状態が続いており、社会や文化の全体像を捉えようとするレトリック全体が見捨てられようとしている。それゆえ、現在のポストモダニズム批判に対しては、ポストモダニズムの重要性を擁護する立場に立つ。マルクスもポストモダニズムも「一緒くた」に忘却されようとしている冷戦後の「動物的」な世界に対する危機意識を持っていることを東は表明する。

#### 四、自由を考える

続いて、大澤真幸との対談『自由を考える』（日本放送協会出版会、2003年）を見ていきたい。第一章「権力はどこに向かうのか」では、まず、9・11テロの意味について東は語っている。一方において、それは政治のサブカルチャー化、すなわち、映画やアニメの想像力と政治的な想像力がほとんど同じレベルになっているということを明らかにした。論壇的な言葉が現実と離れたサブカルチャーと変わらなくなってしまっている。他方で、それはセキュリティ化という問題を露呈させた。セキュリティの意識が高まり、テロリズムやその他のリスクや暴力を抑え込むために、システムの情報管理を行う傾向がはっきりしてきた、という。すなわち、9・11をきっかけに見えてきた世界は二層構造をもつ世界であり、一方ではシミュラクルの戯れ（シミュラクル・自由の層）があり、他方で情報管理のシステム（データベース・管理の層）がある世界である。

「大きな物語」（「神」、 「第三者の審級」）が衰弱した後、セキュリティの権力が台頭してきた。その背景として、技術や環境を管理することで神が不在であっても秩序を保つことが可能である、ということがある。神がいなくなってもすべてが可能であるわけではなく、すべては物理的限界があり、その「可能」の

外延は技術や環境によって決定されている。その限界を変えるのがセキュリティの問題である。大きな物語が弱化していくなかでも、産業社会を維持しなくてはならず、その秩序維持の新しい「知恵」ないし方法として、セキュリティの発想や情報管理の発想がでてきた、というのである。これを東は「環境管理型権力」と呼び、従来の大きな物語の共有に基礎をおくタイプの権力を「規律訓練型権力」と呼んで、対比させている。

規律訓練型権力は、諸個人の内面に規律を植え付ける権力であり、価値観の共有を基礎原理にしている。それに対して、環境管理型権力（生権力）は人の行動を物理的に制限する権力であり多様な価値観の共存を認める。規律訓練型社会から環境管理型社会への移行は、ネットワークやユビキタス・コンピューティングによって、技術的に支えられており、秩序維持は大きな物語や神なしに可能となる。環境管理型社会は、多様な価値観を共存させる多文化でポストモダンなシステムではあるが、家畜を管理するように人間を管理するシステムである。「神がいなくなったことと、セキュリティが上昇していることは権力論的に等価」なのだという。「動物的な限界」をいかに有効に活用して社会秩序を形成するのか、ということが今の社会の大きな方向である、とされる。環境管理型権力の例としてマクドナルドの消費者管理が挙げられる。そこでは内面的規律による管理ではなく、硬い椅子やBGMの音量を上げることにより消費者の回転率を上げるという、動物的な限界に訴えかけた管理が行われている。

環境管理型権力はマクドナルドの硬い椅子のように、所与の環境として大義も正統性も考えさせない。問いそのものを無意味化させる。人間は椅子が硬いとか柔らかいとか、その程度の問題で簡単に生きたり死んだりする。そうした哲学から最も遠い場所を、東は「確率」「郵便」「動物」「環境」「アーキテクチャー」などと呼ぶ。環境管理型の権力のもう一つの例として、東はコンピュータの例を示す。今日、ウインドウズのソフトが透明な環境になっているが、このことはそれ以外の可能性を問うことができない「権力」あるいは「アーキテクチャーによる管理」になっている、という。

以上のように、環境管理型の秩序維持が台頭しているセキュリティ社会では、自由という問題意識そのものが消滅していく。つまり、自由か不自由かの差異を問うこと自体が無意味化している。一方で、現代人は動物的に管理されているがゆえに、動物性を否定するために人間的な「物語」を求めるのだが、それらは秩序維持のシステムとは関係なくなってきた。

また、ユビキタス・コンピューティングによって個人認証するような環境管理型社会では、主体の匿名性が縮減していく。それは主体の交換可能性や偶然性に対する意識を衰微させ、他者であったかもしれないという想像力を失わせる。私としての固有で同一的な主体と、それを裏打ちする偶然的で確率的な交換可能性の二つがあって、人間が人間でいられる。セキュリティの権力は人間の偶有性を奪う権力である。匿名的になれるという想像力がなければ、人は普遍的な共感を、あるいは社会全体を見渡す視点を手に入れられない。各人が互いの固有性に基づいてゾーニングされているかぎりにおいて、ほかのゾーンで展開される人生についてほとんど考えなくなってしまう、とされるのである。

第二章「身体になにが起きたのか」においては、まず、イタリアの思想家ジョルジョ・アガンベンのいう、人間の身体の二つの契機である「ゾーエー（生物的身体）」と「ビオス（政治的身体）」の概念を援用しつつ、議論が進められる。現代社会では生物的身体と政治的身体とが乖離している。遺伝子情報やIDカードなどのデータベースによって、生物的身体を管理することの上に価値観の多様性が存在しており、セキュリティ社会では多様性が担保されるシステムになっている。一方に剥き出しの身体、生物的身体、動物的な生（ゾーエー）の欲望を簡便に満たす装置（コンビニなど）があり、他方に機械的なコミュニケーション（ファミレスやコンビニなどにおけるマニュアル化した対応、ビオスの希薄化）があり、そのどちらにも従来の「人間性」はない、とされる。

この10年間、日本では文学や思想の言葉は影響力を失い、その凋落を心理学や社会学のレトリックが埋め合わせている。その背景にあるのが「動物化」であり、秩序編成の焦点は剥き出しの生の管理（セキュリティ）になっている。

シミュラークルの領域について語るには哲学ではなく、フィールドワークやカウンセリングの言葉の方が適しているのだが、データベース的領域（情報管理的な領域、生物的身体の領域）について思想的で抽象的な言葉で語る用意をしたほうがいい、と東は述べる。

私たちの社会は自由といえきわめて自由であるが、管理されているといえきわめて管理されている。一方には多様性があり、他方には情報管理がある。「サイボーグ的」な身体と、剥き出しの「動物的」な身体とがともに存在している。リゾーム的なネットワークの増大（世界中の市民がコミュニケーションを交わす地球大の開かれた公共圏の生成）と情報管理の拡大（セキュリティの強化、全面的な警察国家化）という、二つの事柄は分離したまま存在しているが、別の論理で記述されなければならない。とはいえ、自由の領域と管理の領域の関係について新しい枠組みが必要である。技術依存が進んだ現在の社会では、技術者が価値中立的な情報提供を行い、それに基づいて市民が合理的な討議を行うというモデルそのものが潰えている。住基ネットの機能拡大、自動改札機、監視カメラの設置などに対するヤバイという感覚を論理化する人文的な概念作業が必要である、とされる。

第三章「社会はなにを失ったのか」では、はじめに、環境管理型権力のさらなる例としてネットにおけるゾーニング（資格に応じてアダルトサイトなどへのアクセスを許可したり禁止したりする方法）とフィルタリング（サイトに内容に応じた得点を配分しておいて、ユーザーが要求するような特定の点数のサイトだけを配信するシステム）が挙げられる。情報や商品を自分で選ぶのではなく、あらかじめ自分が好みそうな選択肢を揃えておいてくれるサービスへの依存が強まると、社会の断片化、島宇宙化が促進される。環境管理型権力のもう一つの例として、鉛筆そのものをなくしてしまうと何も書けなくなるが、そうした行動の可能性の摘み取りは意識されにくい、ということも指摘される。

次に、再び匿名性の問題について言及がなされる。固有名とは名前が社会の中で伝達され、誤配、誤解に晒され、幾度も訂正されることで初めて生まれる

ものである。しかし、情報技術の充実は誤配可能性を減らしている。匿名性の問題はこの誤配可能性の議論の延長線上にある。確定記述はデータの集合であって、それでは固有性は把握できないとこれまでは考えられてきたが、高度な情報技術に支えられた管理型社会はそれを可能にするかもしれない。

こうした状況であるがゆえに、誤配可能性を育てる必要がある。現在は、誤配可能性が小さくなり、人々は自分が固有の存在だと感じられなくなっている。また、誤配可能性が少ないと、偶然性が排除され、フィルタリング（あらかじめ行われる情報の取捨選択）によって、社会の断片化が進んでしまう。

従来は確率や運命といった偶然性の問題だった領域が、統計的な計算の領域に置き換わっている。たとえば、遺伝子欠陥を持つ胎児を排除する、遺伝病の死期を正確に予見するなどである。各人の固有性の尊重に由来するポストモダン社会の断片化＝島宇宙化、そしてそれを補うための情報管理の強化が行われており、住基ネットは最終的には先進国共通の仕様になるのではないかと東はいう。『帝国』においてネグリとハートが、近代的で国民国家的な臣民化＝主体化のシステムはもはや作動しておらず、現在の主体ないし主権のシステムは、多様な個人を多様なまま管理するシステムである、と指摘したことは重要である。マルチチュードをマルチチュードのまま、つまり多様性を維持したまま、情報管理システムによって帝国という全体的な秩序が生成しているということである。

東は動物的な生について、ハッカーは、「楽しい」ということに大きな価値を置いているが、一種のアディクション＝薬物依存であり、そのために健康や対人的コミュニケーションが蝕まれていることも多いのではないかと、いう。アディクションで疲弊している人が多い。オタクは第三者の審級を失い、その喪失を消費財へのアディクションで代替した存在である。他者に関心を持たず、自分の趣味にはまっている人（単一の消費財にはまってしまったスペシャリスト）が経済的・社会的に大きな影響力を持つ。そうなるとうまう、第三者の審級は失われていく。アディクションを批判する社会的な根拠を見出せない

くなっているものであり、それは全面的な動物化ということである。そして動物的・アディクティヴな消費は批評行為を不可能にする。作品の消費の根拠が身体的な快樂のみにもとづくようになり、批評＝解釈は趣味の行為でしかなくなる。批評不可能な身体的快樂の技芸へ文化一般が還元されている、とされる。

最後に、自由とは何かという問いに言及がなされる。ポストモダン社会の環境管理型権力は、「自由が奪われている」という感覚そのものを縮小するように働いている。自由があるのかないのかもわからない状態に放置される。また、環境管理型権力による匿名性・偶有性の縮減は他人同士の共感を断ち切ってしまう。鳥宇宙化により、自分は彼／彼女であったかもしれないという、交換可能性の想像力の範囲が狭くなってしまふ。人間的な共感を育てるためには偶有性の再編成が必要である、ということが指摘される。

むすびの言葉として、現代思想の改良を不断に続けることで、状況に対応する言葉を少しずつ作り出し、他方で凡庸な実践を積み重ねていくだけで、と東は述べている。

## 五、批評

以下、東の議論に関する疑問点をいくつか指摘しておきたい。

### ① 近代は終焉しているのか？

これまで見てきたように、東の議論は現代日本におけるポストモダニティの社会理論と位置づけることができるだろう。先に触れたように、『動物化するポストモダン』では、16頁において1970年代以降の文化的世界をポストモダンと呼ぶとしており、104頁においては、1914年から1989年までの75年間をかけて近代からポストモダンへの移行がゆるやかに行われた、と述べている。また、131頁では、「部分的なポストモダンから全面的なポストモダンへの大きな流れは…、そこに生きる人々の動物化を意味する」としたうえで、1995年以降を「動物の時代」と名づけたい、としている。どの時点で、ポストモダニティに移行したのか、という点で、東の議論は一貫していない。ともあれ、

これらのどの時点で切断するにせよ、現代がすでにポストモダニティに移行したという認識を東は示し、現代と近代との断絶性を過度に強調している。

また、東は現代における「大きな物語」、「超越性」、「神」などの消滅を自明視しているが、この点も、彼が現代をポストモダニティとして把握していることを端的に表徴しているといえよう。また、「思想」や「文学」の無力化や社会的現実との乖離を指摘し、長い間、普遍的なハイカルチャーと見なされてきた「思想」や「文学」が、無数のサブカルチャーと同型のタコツボに転化した（『動物化する世界の中で』159頁）と述べている点も、近代の終焉を示唆している。

しかしながら、現在、近代の「大きな物語」は本当に消滅しているといえるのだろうか。近代が終焉し、ポストモダンの時代に完全に移行したといえるのだろうか。確かに、社会主義が崩壊した1989年以降、フランシス・フクヤマがいうように、国民国家を前提とした資本主義プラス自由民主主義の勝利によって近代は終焉したかのように思われるのであり、東はそれを「動物化した消費社会の勝利」（『自由を考える』180頁）としている。だが、だからといって、現代を完全なポストモダン、そして環境管理型権力が支配する「動物の時代」といいきってよいのだろうか。現代はポストモダニティというよりもむしろ、ギデンズやベックのいうような「再帰的近代化」の時代ないし「高度近代」、「徹底化された近代」、「第二の近代」と位置づけたほうが適切であるように思われる。

社会主義という物語が消失したからといって、あらゆる「大きな物語」が消滅したとするのは早計であり、自由・平等・進歩といった近代主義的な理念すべてが無効になってしまったわけではない。むしろ「大きな物語」は再帰化され、より合理的な反省作用のもとに置かれることによって、より洗練されたときえいえるのである。単純な近代化の時代から再帰的近代化の時代に移行することによって、自由主義・進歩主義・民主主義などの理念は単純素朴かつ愚直に追求されるものではなく、絶えず自省的な反問にさらされながらその実

現が希求されるものになっている。たとえば、エスニック・ナショナリズム台頭の問題などに見られるように、グローバリゼーションとともに、国民国家を単位とした民主主義（ナショナル・デモクラシー）の限界が露呈しつつあり、グローバルな民主主義（コスモポリタン・デモクラシー）を模索しなければならなくなっている。すなわち、現在、グローバルなコスモポリタン社会をめざすという、新たな「大きな物語」が必要とされており、各種マイノリティの「承認をめぐる闘争」は継続中なのである。それゆえ、近代が終焉しているとみなすことはできないのである。

とはいえ、以上のように、東の議論はポストモダニティの理論として位置づけることができるのであるが、東自身が純然たるポストモダニストであるといえるかどうかという点については大きな疑念が生じる。というのは、東の問題設定がいささか近代的であるように思われるからである。

たとえば、「大きな物語」の崩壊、「おたく化」＝「動物化」による社交性・共感性の衰微や社会の断片化に対して、東は超越的ではない普遍性や共通性を担保しようとしている。精神科医の斉藤環との対談で、東はポストモダン化した「社会の統合の根拠はデータベースになるのではないか」と述べて、「いろいろな人がタコ壺に入ってもいい。…ただし、そのタコ壺から生まれてきた成果がデータベースとして匿名的な公共に還元されるシステムを作る必要はある。そうすれば、世の中みんなタコ壺だとしてもタコ壺へのアクセス回路が開け、行ったり来たりできる」としている<sup>1)</sup>。また、『動物化するポストモダン』158頁においては、『『小さな物語への欲求』と『大きな非物語への欲望』の解離的な共存』において、両者が「過視的」につながっていることを示唆している。「過視的」とは東の造語で「過剰に可視的」という意味で、見えないものをどこまでも見えるようにしようとし、その試みが止まるところのない泥沼の状態を指している、とされる。「見えるもの＝小さな物語」から「見えないもの＝大きな非物語＝データベース」へと遡行しようと試みながら、しかし果たされないまま小さな物語の水準を横滑りしていく不発の構造が「過視的」というこ

とである、という。以上にみられるように、閉域化した無数の「小さな物語」(＝タコ壺)をデータベース(＝非物語)によってつなぐ回路を確保し、脱超越的であるとはいえ、一定の普遍性や共通性を東は模索しようとしている。こうした東の脱超越的な普遍性回復の企図は、再帰化した(脱根拠化した)近代の「大きな物語」そのものであるように思われる。その意味で東を単純にポストモダニストとみなすことは困難なのであり、むしろ再帰化した近代のただ中でラディカルに思考する再帰的な哲学者と位置づけたほうが適切である。

## ② 「動物化」概念に対する疑問

「動物化」概念についての問題の一つは、東自身が「動物化」に関して両義的な態度をとっているということである。一方において、「おたく」の動物化は一種のアディクション(中毒、依存症)であるとして、否定的・批判的に捉えられている。『動物化する世界の中で』では、「マルクスもポストモダニズムも一緒に忘却されようとしている…冷戦後の『動物的』な世界」に関する「危機意識」を表明している。他方、斉藤との対談において東は「僕の『動物化』は肯定的な言葉なんです」と述べている<sup>2)</sup>。こうした「動物化」の評価の曖昧さに関するさらに詳しい説明が必要なのではないかと思われる。(また、この両義性は東自身がモダンとポストモダンの間で宙吊りになっていることを示唆しているように思えるのである。)

しかしながら、「動物化」の議論において、この点よりもさらに重要なことは、「おたく」と「動物」とを同一視していることの問題性である。先に見たように、東はコジェーヴの「動物」概念に依拠し、人間は「欲望」を持つが動物は「欲求」しか持たない、としている。「欲求」とは欠乏一満足 of 単純な回路である。それに対して「欲望」は間主体的な渴望であり、人間の「欲望」は他者を必要とする。自己意識を持つ人間は自己が他者から承認・賞賛されることを「欲望」するがゆえに「欲望」には限界がない。動物化とは間主体的な構造が消えた状態の到来を意味しているとしたうえで、現代日本の動物化の事例として東は「おたく」を挙げた。「おたく」は自分だけの「萌え」を追求し、

間主観性や共感性や社交性をもたない、というのである。たしかに、「おたく」における「コミュニケーション不全症候群」については、すでに中島梓が1990年代初めに指摘していたことであり、「おたく」は「他人の存在への知覚障害」をもつものとして認識されていた<sup>3)</sup>。しかしながら、「おたく」において共感性や物語性が完全に消失してしまっているとは考えにくい。

たとえば、「おたく」の消費活動が理想のアイドル・究極の車・最高性能のパソコンなどのような「ある種の理想的状況へ近づく」ことにつながっていることが指摘されている<sup>4)</sup>。すなわち、そこには強度のナルシシズムの存在を見出すことが可能であり、そうであるかぎりにおいて、その理想を評価してくれる他者（趣味を同じくする他者）が想定・内面化されていることは間違いない。また、「おたく」の因子として、共感欲求・帰属欲求・顕示欲求があることも指摘されている<sup>5)</sup>。つまり、「自分のこだわりの対象に関して、そのよさを他の人にも知ってもらいたい、趣味の仲間を増やしたいという心理。また、自分自身も世間から注目されたり、理解されたいという欲求」や「価値を共有できる集団を形成し、その集団へ帰属することを強く求める心理」や「自分なりに集めた情報や作品の解釈・批評をインターネットなどを用いて発信したいという心理」という「おたく」的な心理傾向があるというのである。こうしたことを思慮すると「おたく」において間主観性や共感性が失われているとする判断は極論というほかはない。少なくとも「小さな物語」はいまだ存続しているといえるのであり、「おたく」には「欲求」しか存在せず、「欲望」は存在しない、というのは明白な誤謬であると考えられる。

このことは「おたく」市場の特性を考えてみても正しいといえる。森永卓郎によれば、コレクション市場、芸術・文化市場のようなマニア市場ないし「萌え経済」においては需要が飽和しない、と述べている<sup>6)</sup>。通常の市場であれば、ある程度、商品が普及すれば需要は飽和してしまう。たとえば、日常生活必需品としての食品や衣服などは一定水準の量を所有していれば、人々は充足してしまう。しかし、コレクション市場、芸術・文化市場、恋愛市場の三つは需要

が飽和しない、と森永はいう。これらの市場に共通するのは、価格競争に巻き込まれることなく、高付加価値を維持できていることである、とされる<sup>7)</sup>。このことは、「無条件に消費をしてしまい、ブレーキが効かなくなる状態の消費」という「おたく」的消費行動の特徴とも符合する<sup>8)</sup>。「好きなモノ、好きなコト、好きなヒト」には金に糸目をつけないことが、「おたく」的消費の特性であり、その意味で、「おたく」においては単純な欠乏—満足—動物的回路が存在するというのではなく、むしろその正反対にナルシズム的な止まるところを知らない肥大化した「欲望」、すなわち間主観的に自己承認を求める渴望が見出されうるのである。

東の議論においては、一方で、「小さな物語」でさえもが消失する「動物化」が強調されるが、他方で、「小さな物語」や「タコツボ」の存在は認めるといった、曖昧さが見られるのであるが、いずれにせよ、評者の見地からは、「小さな物語」どころか「大きな物語」も、再帰化しているとはいえ、健在なのである。社会的意味＝物語を求める存在としての「人間」はまだ「動物」にはなっておらず、大小さまざまな共同主観的な「物語」を生きている、と考えられるのである。「大きな物語」や「小さな物語」が再帰化・相対化・流動化しているとはいえ、健在であることは、現代社会においてさまざまなマスメディアやマイナーメディアが健在であることと無関係ではないと思われる。つまり、さまざまな種類のメディアが作りだすメディア・コミュニティが、大小さまざまな共通の物語を紡いでいくと考えられるのである。東の議論は、「物語」の解体が「動物化」をもたらしているという論理構成になっているが、「動物化」の前提としての「物語」自体が崩壊しているとはいえない。そしてそれゆえ、「動物」は現時点ではまだ現出してはいないと考えられるのである。

### ③ メディア・テクノロジー決定論に対する疑問

東の議論はまた、メディア・テクノロジー決定論に陥っているともいえる。ポストモダンでは「大きな物語」が雲散霧消し、社会に共感性・共通性がなくなり、動物化した人々に対してデータベース的権力、環境管理型権力が必然的

に猛威を振るうようになる、という宿命論的な見通しが語られている。(こうした単線的な社会変動理論は高度監視社会に関する既存のディストピア言説に通じるものがある。)

たとえば、東は『自由を考える』において、住基ネットの機能拡大、自動改札機、監視カメラの設置などによる匿名性の縮減について危惧している。ユビキタス・コンピューティングによる個人認証がなされる環境管理型社会では主体の匿名性がなくなっていく。匿名性の衰微は、自分の固有性に基づく生活圏以外の他者に対する想像力を奪い、普遍的な共感や社会全体を見通す視点を喪失させるというのである。そして人間の動物化・嗜癖化および社会の断片化・多様化は進行するが、情報管理システムによって全体的な秩序は生成されるというわけである。

しかしながら、一方的なディストピア化に対抗する手段は存在するのではないか。再帰的な市民や市民的政府による情報や環境の民主的コントロールは可能なのではないか。弁護士の牧野二郎は自己情報コントロール権に言及し、生体認証技術を批判しつつ、PKI (Public Key Infrastructure) という新しいシステムを紹介している<sup>9)</sup>。PKIとはオンラインにおける本人確認のための電子証明書を発行するインフラであり、公開鍵暗号方式を使う仕組みである。現在、オンラインにおける取引や個人情報登録の際に使用されているSSL (Secure Socket Layer) という暗号方式も、じつはPKIの技術であり、サーバー証明書とクライアント側の証明書を交換して相互に確認しあうというシステムである。生体認証という本人確認の仕組みは認証の権限を一方的に相手方に提供するといった、不平等な構図があるのだが、PKIは認証局が保証し、有効性が確認されている情報を利用する仕組みであり、そこには相互の平等性や安全性が存在する。

牧野はさらに、カナダの市民認証サービスを紹介している<sup>10)</sup>。カナダではGOL (Government On-Line) という市民サービスがあり、国民に対して電子証明書を発行して、オンラインでこの証明書を利用することで、電子申請などができるようになっている。その電子証明書には氏名や住所などが記載されていな

い。このシステムでは証明書に表示されるのは特定の番号だけで、認証局では個人をトレースすることが可能であるが、必要以上に個人情報を知らせないようにしている。政府諸機関に対して情報を共有させない、必要以上に個人情報を持たせないという配慮がなされている、という。

情報テクノロジーが進歩し、工学化が進行したとしても、道具としてのシステムの良し悪しを判断するのはわれわれであり、システムやメディア・テクノロジーが一方的に透明な存在としてたち現われてくるわけではない。メディアとは文字通り、手段や道具を意味しているのであり、われわれがその適切な使い方を熟考し、選択していかなければならないものである。東が危惧するように、メディア・テクノロジーの進展の自然な流れとして、ないしその宿命的な結末として、匿名性や自由が消失していく、というわけではない。メディアが社会に対して一方的に影響を及ぼすだけではないからである。大切なことは、メディアと社会は相互影響関係にあるということ認識することである。たしかに東が指摘するように、脱匿名化に向かう趨勢は現代社会において存在する。だからこそ、そうしたリスクをヘッジするために、市民の主体的な自己情報コントロール権を担保したシステムを確立していくことが重要なのである。

以上、東の言説は情報化に関する現代社会論として、きわめて独創的な議論となっており、とりわけ環境の「工学化」（＝環境管理型権力の台頭）による人間の「動物化」というテーゼは、情報社会の未来を考える際に、無視することのできない重要な視点を提供しているといっていいただろう。とはいえ、東が近代の終焉（「大きな物語」の解体）という不確実なテーゼと素朴なテクノロジー決定論を前提している点に関して、そしてそうした前提に基づいて、環境の「工学化」の不可避的な帰結として人間の「動物化」がもうすでに生起しており、いかなる近代的な企図もその問題に対して全くの無力である、と示唆している点に関して、評者は大いなる疑念を懐かざるをえないのである。

## 注

- 1) 斎藤環『OK? ひきこもり OK!』マガジンハウス, 2003年, 237頁~254頁
- 2) 斎藤環『OK? ひきこもり OK!』マガジンハウス, 2003年, 239頁
- 3) 中島梓『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房, 1991年, 246頁
- 4) 野村総合研究所オタク市場予測チーム『オタク市場の研究』東洋経済新報社, 2005年, 13頁
- 5) 野村総合研究所オタク市場予測チーム『オタク市場の研究』東洋経済新報社, 2005年, 16頁
- 6) 森永卓郎『萌え経済学』講談社, 2005年, 118頁
- 7) 森永卓郎『萌え経済学』講談社, 2005年, 157頁
- 8) 野村総合研究所オタク市場予測チーム『オタク市場の研究』東洋経済新報社, 2005年, 13頁
- 9) 牧野二郎『個人情報保護はこう変わる』岩波書店, 2005年, 233頁~238頁
- 10) 牧野二郎『個人情報保護はこう変わる』岩波書店, 2005年, 239頁~242頁